

〈実践研究〉

乳幼児の豊かな表現活動を支える教材の在り方について

——音楽あそび（音あそび）を中心に——

渡 邊 由美子*, 福 間 久 美**

Quality evaluation of teaching materials to support
the pregnant expression of music in young children

——Focus on playing music——

Yumiko Watanabe and Hisami Fukuma

I、はじめに

2018年4月、本学附属幼稚園が地域のニーズに応える「認定こども園」として新たなスタートを切った。学園内を散歩する乳幼児の姿を見ることが多くなり、乳幼児が日常生活やあそびの中で自分の感情や気持ちをどのように表現し楽しむのか、自らの目で確かめたいと考え、本研究を考案した。

2017年に告示された『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』¹⁾の満1歳以上満3歳未満児保育に関する領域「表現」の内容の取扱いに、「園児が試行錯誤しながら様々な表現を楽しむことや、自分の力でやり遂げる充実感などに気付くよう、温かく見守るとともに、適切に援助を行うようにすること」と「受容的な関わりの中で自信をもって表現することや、諦めずに続けた後の達成感等を感じられるような経験が蓄積されるようにすること」が示されている。子ども達が自分でやり遂げる充実感を得るための教材や環境、それを温かく見守る適切な援助について、音楽に関わる教材を対象として、その有効性を確かめる研究を進めることにした。

マクドナルドとサイモンズ²⁾の「音楽的成長と発達—誕生から6歳まで」には、創造的音楽行動を促進する要因として次の4項目が挙げられている。

- ①美しい響きを生み出す楽器
- ②協力的な物的環境及び情緒的環境
- ③教育的な範囲内で、自由に選べる選択権
- ④時と場合に応じてリーダーであったり、立会人であったりまた音楽仲間であったりする教師。

ここでいう創造的音楽行動とは、自発的に歌ったり踊ったり楽器を奏でたりする活動のことである。本研究の目的は、この4項目に着目して、乳幼児期の音楽表現活動を支える教材と、その教材を用いての活動が乳幼児に豊かな感性や表現力の培われていく過程を考察することである。

II、参加園児と実施場所

対象となる2歳児クラス園児は、10月では8名であったが、11月に2名、12月に1名が新たに入園したため、12月の時点では11名（女児7名、男児4名）となった。「楽器であそぼう」1回目の10月15日の時点で8名中5名は満3歳であった。

活動に主に使用した2歳児クラス保育室は約43㎡で、採光も十分で、幼児トイレや手洗いなど設備も整えられ、窓側にアップライトピアノが設置されている。また3回目に使用した乳児棟多目的室は、約68㎡で、3方向に窓のある長方形の明るい部屋である。

III、実施方法と教材としての楽器

関西女子短期大学附属幼稚園認定こども園2歳児クラスにおいて、3名の保育者の協力を得て、2019年10月より2020年1月まで、2週間に1回、著者らがプログラムした「楽器であそぼう」（音楽あそび、音あそび）を30～40分程度実践していただき、その様子を、著者らも参加しながら観察した。子どもたちの生活リズムのなかで、もっとも落ち着いて集中できる時間帯（11時から30分程度）で実施した（表1）。

受付日 2021. 5. 20 / 掲載決定日 2021. 7. 29

*関西女子短期大学 教授

**関西女子短期大学 准教授

表 1 楽器であそぼう 全 7 回の概要

	月日 時間	活動場所	参加園児数	活動内容
1 回目	10 月 15 日 (火) 11:00~11:30	保育室	7 名	楽器との出会い
2 回目	10 月 29 日 (火) 11:00~11:30	保育室	7 名	楽器に親しむ
3 回目	11 月 12 日 (火) 11:00~11:40	多目的室 保育室	10 名	ミュージックサーキット 1 回目
4 回目	11 月 26 日 (火) 11:00~11:40	多目的室 保育室	7 名	ミュージックサーキット 2 回目
5 回目	12 月 10 日 (火) 14:00~14:20	保育室	7 名	好きな楽器を自由に鳴らす
6 回目	12 月 24 日 (火) 11:00~11:30	保育室	10 名	ミュージックパッドでド、レ、ミ、ファ・・・
7 回目	1 月 14 日 (火) 11:00~11:30	保育室	9 名	すずであそぶ

本来ならば音楽あそびの直後に、毎回保育者からプログラムについての意見やアドバイスをいただくべきであるが、保育を中断するわけにかなかったため、数回をまとめて振り返ることとなった。

「ミュージックサーキット」とは、子どもたちが自由に楽器を手に取り鳴らすことができる仕組みで、今回の「楽器であそぼう」活動の 3 回目と 4 回目に実施したプログラムでは、この「ミュージックサーキット」が様々な音楽あそびへ繋がるように組み立てた。日常の保育において、子どもたちが手にする楽器といえばカスタネット、すず、タンブリンなどが一般的であるが、今回のミュージックサーキットを含めた「楽器であそぼう」では、容易に音を奏でられること、ピッチ（音程）のある楽器とない楽器を混在させること、子どもたちが安全に取り組めることを条件として、子どもたちがこれまで出会ったことのない楽器を選ぶことにした。さらに、玩具の要素もあり、転がしたり、触れたり、叩いたり、押しったり、踏んだりとその動作（奏法）が様々で、子どもたちの興味を惹く楽器を選んだ。以下に選定した楽器について述べる。

1、オーボールレインスティック（以下オーボールという）：体鳴楽器（振って音を出す打楽器）に分類されるラトルを起源とするポリウレタン製のボールで、中央にレインスティックが収納され、振ると雨のような音がする。対象が 2~3 歳児であったため、玩具としての要素が大きく、乳幼児の知育玩具として人気が高いものである。乳児でもつかみやすく、投げても安全であることから、今回のミュージックサーキットのスタートに用いた（図 1 a）。

2、ロリポップドラム：ロリポップキャンディ（いわゆる柄のついたペロペロキャンディ）状の打楽器（太鼓）

で、ここでは直径 25 センチの中型と直径 30 センチの大型を用い、音の高低や音量の違いに気付くことを期待した。インパクトのある形状はサーキットの花形となった（図 1 b）。

3、キッズジャンベ：南アフリカ起源の深い胴をもつ片面太鼓であるジャンベを子ども用に小さくしたもので、今回使用したキッズジャンベの側面にはカラフルな模様があしらわれ、子どもの興味を惹く工夫がなされている（図 1 c）。本来手のひらなどで叩いて演奏するが、今回はスポンジマレットで叩くことにした。

4、バスドラム：直径 36 cm、高さ 53 cm のドラムで子どもが立って叩きやすい高さで、ヘッドが柔らかく、音は出やすいが音量が大きくなりすぎないものである（図 1 d）。

5、ミュージックパッド：直径 30 cm、高さ 4.2 cm のパッドで、色の違う 8 種で構成される。弾力のある表面を踏むと、それぞれがド、レ、ミ、ファ、ソ、ラ、シ、ドと、1 オクターブの音階を鳴らすことができる（図 1 e）。

6、ミュージックベル（ベルハーモニー卓上型）：色の違う 8 種のベルで、このベルを低い長方形のテーブルの上に並べ、ベルの中央を軽く叩くとそれぞれド、レ、ミ、ファ、ソ、ラ、シ、ドと 1 オクターブの音階を持つ音が鳴る（図 1 f）。

7、ウインドチャイム（ツリーチャイム）：長さが少しずつ異なる 35 本の金属棒が糸で吊り下げられたもので、触れると金属棒同士がぶつかり合い、キラキラと華やかな音を出す体鳴楽器の一種である（図 1 g）。

8、エッグシェイカー：長径が 5.5 cm、重さ 24 g、振ると音が鳴るたまご型の体鳴楽器で、子どもでも持ちやすい形状をしている（図 1 h）。



図1 「楽器であそぼう」で使用した楽器

- a. オーボール、b. ロリポップドラム、c. キッズジャンベ、d. バスドラム、e. ミュージックパッド、
f. ミュージックベル、g. ウィンドチャイム、h. エッグシェイカー、i. すず、j. オーシャンドラム

9、すず：球状の金属に一部割れ目を入れ、その中に小さな玉を入れてある体鳴楽器（図 1 i）。振って奏でる。
 10、オーシャンドラム：波の音を再現する擬音楽器。直径約 40.5 cm、高さ約 6.5 cm で、小さな無数のアルミボールが入り、底面に魚などの模様が描かれている。（図 1 j）ミュージックサーキットでは使用しなかったが、1 回目、2 回目の楽器あそびに使用した。子どもたちももっとも興味をもった楽器の一つであった。

IV、実践内容

1、楽器であそぼう 1 回目

10 月 15 日 11:00～11:30

保育室 園児 7 名、保育者 2 名

初回の「楽器であそぼう」に用いた楽器と活動の様子を表 2 に示す。

(1) 「これなんやろう？」と保育者が大事そうにオーボールを掲げ、逆さにしてスティックの中の小さな球が転がる音を子どもたちと共に聴いた。次に保育者が子どもの名前を呼びながら一人ひとりに手渡し、準備した二つのオーボールに全員が触れた。ここでは音を楽しむというより、オーボールに触れることへの興味が先行する。ひとしきり子どもたちはオーボールであそんだが、著者らは一人にひとつオーボールが必要であると気づき、次回には人数分準備することにした。「今度はいっぱい持ってきてくれるんやて」と保育者に予告していただく。

(2) エッグシェイカーで Go and Stop（ピアノ音が鳴ると歩き、ピアノ音が止むと止まる）：保育者「可愛いものがあるよ」と言いながら「たまご」のお話。そつとやさしく扱うこと、落としたら割れることを子どもたちに伝え、「たまごとお話しするよ、何てお話しかな…」と言いながらエッグシェイカーを振ると子どもの一人が「シャカシャカ…」と反応する。エッグシェイカーを振って身体の一部にくっつけるあそびのあと、〈さんぽ〉（ピアノ）に合わせてエッグシェイカーを振りながら歩く。音楽が止まると静止する。エッグシェイカーを振ると音が出て、動きを止めると音が止まることを体験す



図 2 オーシャンドラムに触れる子どもたち

る。

(3) 床を叩いてあそぶ：床を手のひらで叩きながら〈どんぐりころころ〉を歌う。最初は床を両手で叩く（二分音符）。次にハイハイの姿勢で床を叩きながら（四分音符）動く。子どもたちは手のひらの感触と音を感じていたようだ。〈おもちゃのチャチャチャ〉（ピアノ）を歌いながら、好きなところで床を叩く。慣れてくると、チャチャチャで叩いてみる。トントントン（オノマトペ）と声に出してみる。

(4) オーシャンドラムを全員で囲む：子どもが持てる大きさではないので、図 2 に示すように、全員が手を添えて、小さな無数の球の動きを見ながら、手に伝わる感触を味わった。ドラムに描かれたイラストを見て「おさかな…!」という声も聞こえた。〈うみ〉（ピアノ）を演奏する。

(5) ウィンドチャイムでクールダウン：最後の楽器、ウィンドチャイムを登場させた。粒をそろえて鳴らすことが子どもには難しい楽器だが、「やさしく鳴らしてみよう」と保育者の言葉で、一人ひとりウィンドチャイムに触れることができた。名前を呼ばれた子どもは少し緊張しながら、丁寧に鳴らした。全員がウィンドチャイムに触れたあと、「変身しよう」「何に変身する？」と保育者の言葉がけで活動が発展する。ウィンドチャイムを鳴らして、保育者と一緒にくると回転し「変身」するが、保育者は何に変身したかには言及せず、一人ひとりが満

表 2 「楽器であそぼう」1 回目

楽器	活動の様子
1 オーボール	保育者がオーボールを手に取りゆっくり揺らしたり逆さにしたり、中央にあるレインスティックの中の小さな球が転がる音を子どもたちと共に味わう
2 エッグシェイカー	保育者がエッグシェイカーを子どもたちに紹介し、子どもたちも喜んで手に取る
3 床を叩く	手のひらで床を叩きながら〈どんぐりころころ〉〈おもちゃのチャチャチャ〉を歌う
4 オーシャンドラム	全員が手を添えて、小さな無数の球の動きを見ながら手に伝わる感触も味わった
5 ウィンドチャイム	子どもたち全員がウィンドチャイムに触れることができた。保育者の言葉がけで変身あそびに発展する

足できるよう配慮した。金属棒に触れば音がしっかり鳴るので子どもたちは飽きずに触れた。

著者らの保育室訪問は3回目であったため、子どもたちは日常の保育から逸脱することなく保育者の「これなんやろう」の言葉から始まった一連の音楽あそびを次々に経験した。30分間で「床」も入れて5つの楽器（音が鳴るもの）が登場したが、子どもたちは、これらの楽器を玩具の一つとして捉えたり、音がする！と言葉にしたり、指でスライドすれば軽やかな音が鳴るものと認識して何度も鳴らしたいという気持ちを隠さなかった。

2. 楽器であそぼう2回目

10月29日 11:00～11:30

保育室 園児7名、保育者2名

「楽器であそぼう」の2回目に用いた楽器と活動の様子を表3に示す。

2回目は1回目とほぼ同じプログラムで実施した（表2）。

(1) オーボール：保育者が楽器の入ったかごを背後において、「トントントンなんのおと？」と問いかけながらオーボールを鳴らす。子どもたちから答えは出ないので、保育者がオーボールを子どもたちに見せる。「キャベツ」「ボール」と声が上がる。保育者が名前を呼び、子どもたちがオーボールを取りに行く。子どもたちは、激しくふったりゆっくり揺らしたりし始める。保育者が〈ボールボールがくつついた〉と歌い始めると、子どもたちも一緒に動きはじめる。保育者が〈どんぐりころころ〉をピアノで弾く。オーボールを転がすあそびが始まり、音が鳴ることや転がして追いかけることに興味を持つ子どもたち。ピアノが止まったら「どんぐり（オーボール）が止まる」など、オーボールを手にして様々な表現あそびに発展する。

(2) エッグシェイカー：かごのなかに色とりどりのリトミックスカーフ（オーガンジー素材1辺約40cm）とエッグシェイカーを準備する。にわたりの巣に見立てたふわふわのリトミックスカーフの中に、エッグシェイカー

が隠してある。見つけた子どもたちは歓声をあげエッグシェイカーを手にする。エッグシェイカーで Go and Stop が始まる。

(3) オーシャンドラム：子どもたちはオーシャンドラムに手を添える。〈うみ〉のピアノ、ドラムに描かれている魚の絵をのぞき込んで、全員で手を添えて、揺らして金属の球が転がる音を聴く。叩くと音が出ることがわかると、ドラムを囲んで自由に叩く。

(4) ウィンドチャイム：保育者がウィンドチャイムを高く掲げて登場する。全員が揺れる金属棒と聞こえる音に集中する。保育者はウィンドチャイムを子どもたちの手がようやく届く程度の高さに持って、子どもたち全員が金属棒に触れ、音を鳴らし、満足したと思えるまでゆっくり移動する。子どもたちはそれぞれが手を伸ばし、金属棒に触れ、飽きることなく繰り返し音を鳴らしていた。

(5) 大きな栗の木の下で：いつも楽しんでいるあそびに戻る。保育者の表情や言葉に集中する子どもも、そうでない子どもも、思い思いに生き生きと動いている。

(6) 活動の終わりに：「おいでおいでおいでおいで A ちゃん、おいで…」〈パンダ・うさぎ・コアラ〉のメロディで全員の名前を呼んで「今日はいろんな音が聞こえたね」と保育者が話しかける。子どもたちの発言の中に「うみ」という言葉があった。オーシャンドラムの音から波の音を連想したのか、オーシャンドラムの内側に描かれた魚たちから「うみ」に繋がったのかは不明だが、子どもたちの理解力・想像力に驚く。また、「たまご」という言葉も聞こえた。エッグシェイカーが印象的であったようだ。

3. 楽器であそぼう3回目

11月12日（火）11:00～11:40

多目的室、保育室 園児10名、保育者2名

3回目の「楽器であそぼう」の楽器と活動の様子を表4に示す。この回で初めてミュージックサーキットに取り組んだ。このミュージックサーキットに用いた楽器の

表3 「楽器であそぼう」2回目

楽器	活動の様子
1 オーボール	一人ずつオーボールを手に取り、転がしてあそぶ
2 エッグシェイカー	かごの中のエッグシェイカーを見つけた子どもたちは好きな色の“たまご”を手に取りピアノに合わせて自由に歩きながらエッグシェイカーを振る
3 オーシャンドラム	オーシャンドラムを全員で支えてゆっくり揺らしながら金属球が転がる音を聴く〈うみ〉(ピアノ)
4 ウィンドチャイム	子どもたちは揺れる金属棒と聞こえる音に集中する。それぞれが手を伸ばし、金属棒に触れ、繰り返し音を鳴らしてみる
5 歌あそび	〈大きな栗の木の下で〉〈どんぐり・きのこ・おいも〉〈おれたちゃドングリ団〉など、いつもあそんでいる歌あそびで思いきり自由に動く

表 4 「楽器であそぼう」3 回目 ミュージックサーキット①

楽器	活動の様子
1 オーボール、ミュージックベル	オーボールを転がして、ベルを鳴らす。一連の動き
2 ミュージックパッド	ド、レ、ミのミュージックパッドを置く。ゆっくり踏み音を鳴らす
3 ロリポップドラム、キッズジャンベ、バスドラム (スポンジマレット 2 本)	スポンジマレット 1 本で思い切り叩く子ども、何度も繰り返し叩く
4 ミュージックパッド	ファ、ソのミュージックパッドを置く
5 すず	人数分のすずを置く
6 ミュージックパッド	ラ、シ、ドのミュージックパッドを置く
7 ウィンドチャイム	ゴール



図 3 1 回目のミュージックサーキットにおける楽器配置

配置を図 3 に示す。

(1) いろいろな楽器でサーキットあそび：「ミュージックサーキット」は多目的室を使用することになり、子どもたちが楽器に触れたり手に取ったりする姿をイメージしながら設置場所の調整をし、楽器を配置した。準備ができたところへ、子どもたちが入ってくる。オーボールでスタート、ミュージックパッド（ド、レ、ミ）、バスドラム、ロリポップドラム、キッズジャンベ、ミュージックパッド（ファ、ソ）、すずを鳴らして、ミュージックパッド（ラ、シ、ド）、ウィンドチャイムでゴールとした。中央のフリースペースにミュージックベル（卓上型）を置いた。

(2) 子どもたちが入室する：部屋に入るとすぐに子どもたちは楽器に向かおうとしたが、ひとまず床に座って〈トントンアンパンマン〉で集中した。何か楽しいこと

が始まると期待をしている様子である。スタートのオーボールを転がすことは、「楽器であそぼう 1 回目」から経験しているので滞りなく転がした。保育者が子どもたちを誘い、どんどん先へ進んだ。最初に試みた二人の園児は、慎重にミュージックパッドを踏み、音を確認した。これでいいのかな？という表情で次に進み、音が鳴るたびに驚き、戸惑いながらも笑顔で自分が鳴らした音を聴いた。後に続く子どもたちも次々と積極的に進んだ（図 4）。2 巡、3 巡と飽きることなく何度もサーキットあそびを経験して、気に入った楽器があると、満足するまで繰り返し鳴らしている。子どもたちの動きがどんどん速くなった。設置した楽器を次々鳴らし、最後のウィンドチャイムを鳴らし終わると嬉しそうに飛び跳ね、ゴールの達成感を味わっていた。

十分に楽器に触れたと保育者が判断した時点で保育室



図4 ミュージックサーキットを楽しむ子どもたち

表5 「楽器であそぼう」3回目 保育室に戻って

歌	活動の様子
1 歌あそび	トントんあたま、トントんおなか、トントんおしり 〈どんぐり・きのこ・おいも〉であそぶ。
2 どんぐりころころ	〈どんぐりころころ〉をいろいろな表情で歌う。
3 ミックスジュース	「あかいくだものはなんだろう?」「・・・?」「りんご?」 〈ミックスジュース〉の歌あそびへ
4 Go and Stop から歌あそび	〈さんぽ〉〈となりのトトロ〉〈線路はつづくよどこまでも〉で Go and Stop 〈あなたのお名前は〉で子どもたち一人ひとり自分の名前を言う。 〈せんたく〉で手をつないで円になりあそぶ。

へ戻り、著者らは日常の保育を観察する。保育者は音楽的スキルも高く、子どもたちの表情や動きを読み取りながら自在に音楽あそびを導入した。この18分程度の活動で子どもたちは自由に声を出し旺盛な反応をみせた。その内容を表5に示す。

A 児の活動

転がした後ベルを鳴らして良い音が鳴ったので、保育者と顔を見合わせてにっこり、他児の様子を観察している。2巡目では、音を鳴らすことはしないが、自分なりのやり方で他児と同じ方向に進んで回っていく。3巡目ではミュージックパッドをみんなと同じ方法で踏み鳴らし、続いて隣のドラムを鳴らし笑顔で次のミュージックパッドへ進み、鈴を持ってゴールのウインドチャイムへ到達する。4巡目以降は、順番を守りながら何度も回る。部屋の中央に置いた（サーキットに入れていなかった）ミュージックベルを、鳴らしている他児を見てA児も順番に鳴らしはじめる。

A児の活動を観察すると、「試行錯誤しながら」音を確認し、「自分の力で」音の鳴らし方を模索し、「充実感に気付く」姿が見て取れる。そして、そこには必ず保育者の共感や見守りがある。これらは領域「表現」の内容の取扱いに示されたことと同様である。また、仲間の行

動にも興味を持ち、模倣することもあり、これまで観察したA児の姿と異なる様子を見ることができた。

4、楽器であそぼう4回目

11月26日（火）11:00～11:40

多目的室、保育室 園児7名、保育者2名

4回目の「楽器であそぼう」では2回目のミュージックサーキットを実施し、用いた楽器と活動の様子を表6に示す。ミュージックサーキット1回目とは楽器の配置が異なる（図5）。

2回目のミュージックサーキットなので、子どもたちは戸惑うことなくそれぞれのペースで次々と音を鳴らし、飽きるまで何度もその行為を繰り返した。ひとつの楽器にこだわる子ども、仲間と競い合うように楽器を鳴らそうとする子ども、その取り組みは異なる。13分過ぎからミュージックパッドとミュージックベルはド、シ、ラ、ソ、ファ、ミ、レ、ドと置き替えた。ミュージックベルをド、シ、ラ、ソ、ファ、ミ、レ、ドと鳴らした後、すぐにド、レ、ミ、ファ、ソ、ラ、シ、ドと繰り返す子どももいた。音階に興味をもち始めたと思える。17分過ぎから子どもたちは思い思いに楽器を鳴らす。2～3歳児の集中力の限界だと判断しつつ、もう少し様子を見ることにする。19分、保育者の「楽器をお家に帰してあげよう」の声がけで子どもたちが片付け始める。

表 6 「楽器であそぼう」4 回目 ミュージックサーキット②

楽器	活動の様子
1 オーボール	転がすことに慣れ、音を鳴らしてあそぶ
2 ミュージックパッド	ミュージックパッドをド、レ、ミ、ファ、ソ、ラ、シ、ドと音階順に置く。一つ一つゆっくり踏んだり、小走りで踏んだり、逆走したり、自由に音を出した
3 ロリポップドラム、キッズジャンベ、バスドラム (スポンジマレット 2 本)	スポンジマレット 1 本で思い切り叩く子ども、何度も繰り返し叩く子ども、マレットが 2 本あると左右にマレットを持ち叩く場面も見られた
4 ミュージックベル (卓上型)	ミュージックベルをド、レ、ミ、ファ、ソ、ラ、シ、ドと音階順に置く。全員が手のひらでポンポン叩くと音が鳴ることを理解し、軽快に音を鳴らし始める
5 ウィンドチャイム	ゴール

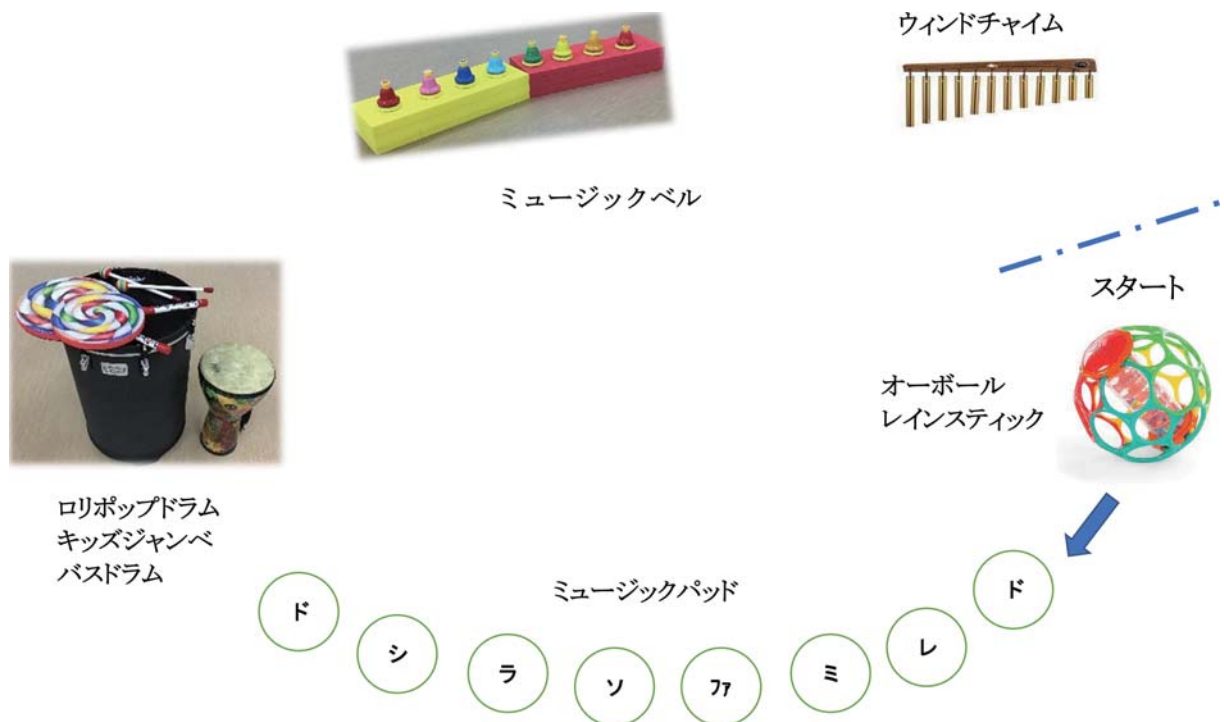


図 5 2 回目ミュージックサーキットにおける楽器配置

最後に残ったウィンドチャイムの周りに全員が集まって名残惜しそうに金属の棒にそっと触れていた。この後、保育室へ戻り 15 分間活動が続く。保育者の読む絵本「いないいないおばけ」「おはながさいた」を 7 名の子どもたちは集中して見る。保育者の弾く〈シューベルトの子守歌〉を聴きながらマットの上で横になる。このようにピアノの音に合わせて季節の歌や子どもたちのお気に入りの歌あそびが続いた。

5. 楽器であそぼう 5 回目

12 月 10 日 (火) 14:00~14:20 (午前中に避難訓練があり変更)

保育室 園児 10 名、保育者 2 名

子どもたちが 7 種類の楽器を自由に手に取り、音を鳴らし、動けるように配置した。ミュージックベルとミ

ュージックパッドは、ド、レ、ミ、ファ、ソ、ラ、シ、ドと音階順に並べた (表 7)。

オーボールを持つ子ども、ミュージックベルを順に鳴らす子ども、ミュージックパッドを踏んで音を鳴らす子ども、すずを持つ子ども…それぞれが好きな楽器を鳴らしている。思い思いの場所で活動する、まったく制約のない自由な時間である。途中でロリポップドラムとバスドラムとキッズジャンベを保育者が子どもたちの方へ移動させる。子どもたちが一斉にドラムのところへやってくる。マレットの取り合いもあるが、喧嘩にならず折り合いがついていた。

表7 「楽器であそぼう」5回目

	歌と楽器	活動の様子
1	オーボール、ミュージックパッド、すず、ミュージックベル	それぞれが自由に好きな楽器を選び、楽器あそびに取り組んだ。楽器の取り合いも生じた
2	ドラム登場	ドラムが出てきたので、子どもたちが注目する
3	絵本を見ながら	〈どんぐりころころ〉を歌いながら、絵本を見る。全員が絵本に集中する
4	どんぐりころころ	ピアノに合わせて楽しく歌ったり、悲しく歌ったり、様々な表情や動きで表現する

B 児の活動

楽器あそびが始まるとオーボールを転がしている。ミュージックベルに集まる他児を見て、オーボールを抱えたまま両手ですずを持ち、その音を聴いている。ドラムの登場にそちらへ移動する他児の様子をじっと見ていたが、人の少なくなったミュージックベルやミュージックパッドへ移動する。しばらくあそんだ後、足元に落ちていたマレットを見つけロリポップドラムを鳴らすことができた。そのままみんなの中へ入ってドラムを叩き、満足したのか、マレットを他児に譲った。数分後、2本のマレットを使い両手で鳴らす B 児の姿を見た。(2本のマレットを使うことは容易ではない)

B 児は他児を観察しながら、保育者の膝で保育者と目を合わせて笑顔が絶えない。一人でオーボールを転がす時も、保育者の方へ顔を向けて安心する。楽器には興味津々で、保育者が促すまでもなく、人が少なくなったミュージックベルのところへ行って丁寧に鳴らし始めた。「諦めずに」自信を持って自己表現し「達成感を感じられるような経験」ができた場面であろう。

6. 楽器であそぼう 6 回目

12月24日(火) 11:00~11:30

保育室 園児 10 名、保育者 2 名

「楽器であそぼう」の 6 回目で用いた楽器と活動の様子を表 8 に示す。

〈コンコンクシヤンのうた〉で様々な動物になりきって表現あそびをする。最後のクシヤン！が待ち遠しい。キャッキヤと声を上げる。〈カエルのうた〉を保育者が

ミュージックパッドで演奏する。初めの部分ド、レ、ミ、ファ、ミ、レ、ドを繰り返して鳴らし、子どもたちの反応を見る。子どもたちが保育者をまねてド、レ、ミ、ファ、ミ、レ、ドと鳴らすことを期待したことが伺えるが、子どもたちはド、レ、ミ、ファ、ソ、ラ、シ、ドと順番に鳴らしていく。ソ、ラ、シ、ドのミュージックパッドを横に外し、ド、レ、ミ、ファだけで試みたが、子どもたちにド、レ、ミ(メロディー)の感覚はまだ育っていなかったとみえ、ド、レ、ミ、ファ、ミ、レ、ドと鳴らす子どもはいなかった。一方、保育者が「どれでも好きな楽器を持ってね」と声をかけると、サーキットで使用した楽器から各々が選び、ピアノに合わせて自由に鳴らしていた。ロリポップドラムの取り合いが始まると、「今の楽器とバイバイして、新しい楽器を持ってね」の声がけで、楽器の交換が行われた。引き続き子どもたちは楽器あそびに集中する。

7. 楽器であそぼう 7 回目

1月14日(火) 11:00~11:30

保育室 園児 9 名、保育者 2 名

最終回の「楽器であそぼう」で用いた楽器と活動の様子を表 9 に示す。

円になって保育者の話を子どもたちが聞いている。離れていた一人が〈パブリカ〉を歌いだし、保育者が「みんなで歌おうか」と立ち上がり、子どもたちも一緒にアカペラで動きを付けて歌う。〈むすんでひらいて〉〈とんぼのめがね〉〈かたつむり〉など子どもたちが親しんでいる歌を次々に保育者のピアノ伴奏で歌った。〈おもちゃのチャチャチャ〉では、チャチャチャのリズムで手拍子ができる。10月の活動と比較すると確実にリズムを

表8 「楽器であそぼう」6回目

	歌と楽器	活動の様子
1	コンコンクシヤンのうた	クシヤン！で大喜び
2	これなんだ？	ミュージックサーキットで親しんだ楽器の音を聴いてあてっこあそび
3	カエルのうた	ミュージックパッドを4個(ド、レ、ミ、ファ)、ミュージックベルを4個(ド、レ、ミ、ファ)置き、カエルのうた
4	自由に好きな楽器を鳴らす	各々好きな楽器を手に持ち自由に保育室を歩く。歩いて止まる、自由に活動することで満足している様子である
5	ウィンドチャイム	手を伸ばしてウィンドチャイムに触れる

表 9 「楽器であそぼう」7 回目 保育室

歌と楽器	活動の様子
1 パプリカ、むすんでひらいて	一人が〈パプリカ〉を歌いだし、保育者の「みんなで歌おうか」の声がけで全員が動きをつけて歌い始める
2 すずであそぶ	すずを持って「だるまさんがころんだ」であそぶ。〈どんぐりころころ〉の歌あそびをする
3 おもちゃのチャチャチャ	歌に合わせてすずの演奏 歌いながらチャチャチャですずをリズムに合わせて鳴らす
4 すずと言葉でリズムあそび	子どもたちの名前に合わせてリズム打ち 果物の名前でもリズム打ち

把握していることが見てとれる。すずを持って「だるまさんがころんだ」で音を出す・止めるを繰り返す。〈おもちゃのチャチャチャ〉では手拍子をすずの演奏に発展させる。

V、おわりに

武満³⁾は、「私たち（人間）の耳の感受性は衰え、また、怠惰になってしまった」と述べている。さらに彼は、「消える存在である」という音の性質（本質）に現代人は気づいていないと言い、「今の私たちの生活環境は（中略）、もう一度、虚心に音を聴くことからはじめよう」と呼び掛けている。彼の言う音とは、自然が作り出す様々な音（小鳥のさえずりや風のそよぎ）であり、作曲家である彼が創生する音楽でもある。その音楽もデータとして蓄えられ、スマホの中にはさまざまなジャンルの音や音楽が無限に存在する。「音は消える」という事実を我々は意識できないでいる。現在の子どもを取り巻く「音環境」も然りである。始終デジタル音があふれ、膨大な音の海に放り投げられたような不安と頼りなさを感じる。子どもたちは起きている間の多くを保育園やこども園、幼稚園で過ごすことになる。各施設において「音環境」に対する考え方は様々であろう。本学のこども園では、幼稚園舎と離れたところに乳児棟を配置し、静かで安全な環境構成がなされている。人の声とピアノの音、楽器の音、生活音、どれも温かく安心できる音である。子どもたちは保育者の配慮がつくり出す静けさの中で安息し、次の場面では「音」を聴き楽しむ「楽器あそび」に取り組むのである。

保育には様々な音あそびが取り入れられているが、子どもたちと新しい音との出会いは、子どもたちにどのような刺激を与え、その刺激はどのように子どもたちに受容され、子どもたちはどのように表出するか？実際に乳幼児が楽しめる教材を研究し、それらがもつ役割を確かめたいという思いがこの研究に着手するきっかけであった。また、ここで述べる「音との出会い」は、保育者が演奏する音との出会いではなく、子どもたちが自身で発

する音との出会いを意味し、先に述べた「創造的音楽行動を促進するもの」と言えよう。以下の 4 つに焦点を当て、今回の実践を考察する。

1、美しい響きを生み出す楽器

子どもが演奏しやすい楽器（教材）のすべてが「美しい響き」を持つものとは限らない。また、子どもは「美しい響き」を求めて楽器を鳴らすわけではない。子どもは楽器の音の違いを聴き、視覚と聴覚両方で楽器あそびを楽しんでいる。2 歳児においては玩具としての要素や多様な色彩も魅力である。「美しい響き」にとらわれずこれらの条件を満たすものとして、今回の「楽器であそぼう」「ミュージックサーキット」の楽器を選定した。子どもたちは珍しい玩具と出会ったときのように楽器に触れ、音を鳴らした。このように転がしたり、触れたり、叩いたり、押したり、踏んだりと簡単な動作（奏法）で音が鳴る楽器を選定したことは適正であったと考える。

教材（楽器）は、出会ったことのないものも含め、既成概念にとらわれず準備すべきであろう。今回は既成の「楽器」を選んだが、楽器を音の鳴るものと考えたなら、子どもたちの身近にあるもの（箱、缶、瓶、紙、自然物など）も楽器と言える。素朴な音から楽器として完成された音まで、これらの様々な音から子どもたちは何を感じ楽しむのか、著者らにとって興味は尽きない。

2、協力的な物的環境及び情緒的環境

7 回にわたる「楽器であそぼう」では、ミュージックサーキットを中心に子どもたちが次々に新しい楽器と出会う場面を構想した。「扉をひらくとそこに見たこともない楽器が並んでいる。子どもたちは視覚で捉え理解し、ワクワクしながら楽器に向かいますね」と保育者の振り返りの言葉。子どもたちはそこにある楽器を叩いて鳴らしたり、踏んで鳴らしたり、振ったり、転がしたり、主体的に動き楽器あそびに取り組んだ。じつと様子を見て友達の後からようやく手を伸ばした子ども、表現

したい気持ちを何かが押さえ込んでしまっていたのか、突然解き放たれたように大きな声で歌い始めた子どももいた。保育者は「7回の楽器あそびを伴った活動が2歳児の保育に適正であった」と言及した。今から何があるのかと保育室を出た瞬間から生じていた期待感が好奇心に繋がり、ミュージックサーキットで準備した楽器との出会いをより興味深いものにした。

3. 教育的な範囲内で、自由に選べる選択権

著者らは、今回のミュージックサーキットを計画する際に、2歳児が演奏できそうな楽器を選定し、それらが教材として相応しいものであるかどうか知ることを目的とした。いずれの教材も子どもたちに充分受け入れられたが、ミュージックパッドだけは体重の軽い子どもにとって、思うように音が鳴らない欠点が見られた。しかし、手で押して音を鳴らしたり、両足で跳びのって音を鳴らしたり、子どもたちはそれぞれ工夫し音を鳴らした。子どもたちに特定の楽器を与えるのではなく、ミュージックサーキットのように自由に鳴らし何度も繰り返すことができる教材の在り方は、子どもたちの「なぜだろう、こうなのかな、こうしてみよう」と考え、探求する心を育み、「きっとこうだ」とやり遂げた時には達成感を味わい、それが自信に繋がる。もちろんここで、保育者の導きや共感が大きな役割を果たすことは言うまでもない。

今回の試みで、子どもたちの楽器への興味を改めて知ることができた。また、子どもたちは「音を聴く」ことができるようになった。保育者も「ミュージックベルで私が〈かえるのうた〉を鳴らしてみると、子どもたちは最後まで聴いていた。以前はこのような聴き入ることはなかった…」と「楽器であそぼう」を振り返り、子どもたちの成長について語った。

4. 時と場合に応じて、リーダーであったり、立会人であったりまた音楽仲間であったりする教師

教師とあるが、ここでは保育者と置き換え考えたい。保育者は子どもの些細な言動を見逃さず、子どもの行動を制限したり強要することなく、「先生楽しそう…わたしも」と子どもたちが自然に引き込まれ楽しいことが経験できるようさりげなく援助している。

著者らは音楽あそびに関わる教材を対象として本研究に取り組み、「ミュージックサーキット」を含む7回の「楽器あそび」の実践を試みた。その結果、様々な音を楽しむことができる多様な楽器の存在と、それらを自由に鳴らし保育者や友達とあそびを共有することが、子どもたちの音や楽器への興味を助長することがわかった。

また、子どもと過ごす保育者の在り方が大きく影響することも、改めて感じるところである。津守⁴⁾は次のように述べている。「(保育者が) 子どもに向かうときには、相手によって表現の仕方は異なる。真夏の太陽の明るさではなく、曇り日の静かな明るさもある。子どもたちの全体の活気の中で、それを反射するだけのおだやかな明るさもある。保育者が子どもとの間で静かな明るさをもって生きるとき、次第に、それぞれの子どもが自分から生命的に動き出すであろう。」

今回のプログラムを実践した保育者らは、子どもたちそれぞれの表出の違いを認めることを大切にしたい。保育者の子どもに対する受容や認めが子どもたちの心に届き、子どもたちの自己肯定感とのびやかな表現活動に繋がったと考える。今回のプログラムを終えて、保育者らは「声を出して歌わなかった子どもが7回の楽器あそびを経験した後、午睡時などによく歌うようになった。ミュージックサーキットの経験は大きかった。月に一度でも続けて実施したい」と語った。明らかに子どもたちに変化が見られた。また、1・2歳児合同保育の時間に、サーキットで使用する楽器を見つけた1歳児たちが、目を輝かせて楽器に近づき手に取ったと報告があった。著者らは保育者としての経験を持たず、専門分野の知見から保育を語ることに少なからず気おくれを感じていたが、今後は「楽器であそぼう」「ミュージックサーキット」を、0歳児から5歳児までの取り組みとして発展させ、附属幼稚園保育者らと協働し、年齢に応じた教材の在り方を研究することで、より実地的な教授内容として学生に伝えることができれば本望である。

謝辞

本研究を進めるにあたり、本研究の目的と内容を関西女子短期大学附属幼稚園関係者に説明し口頭にて同意を得ました。実践にご協力いただきました同園稲垣晃子氏、杉岡 朋氏、石神祐奈氏に深く感謝申し上げます。並びに本研究は2019年度関西女子短期大学奨励研究費の助成によるものであり、ここに記して感謝の意を表します。

引用文献

- 1) 内閣府・文部科学省・厚生労働省：『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』、チャイルド本社、2017.
- 2) ドロシー・T・マクドナルド&ジェーン・M・サイモンズ：『音楽の成長と発達－誕生から6歳まで－』、溪水社、1999、p.60.
- 3) 武満徹：『遠い呼び声の彼方へ』（武満徹著作集3）、新潮社、2000、pp.38-39.
- 4) 津守真：『子どもの世界をどうみるか』、日本放送出版協会、1998、p.162.